断章

旭川のアイヌ語地名研究 ㊿

高橋 基

―旭川のカムイコタン⑦―

前回、明治二十一年に神居古潭の和人定住者第一号の安藤彦松が、その年に八つ目鰻を一万尾漁獲し、それを乾燥して札幌で一尾五厘で販売したことを紹介した。その安藤彦松定住から百年目の昭和六十三年に、『神居古潭開基百年記念誌―足跡』が刊行された。**写真①**「タモによるヤツメとり」は、『足跡』に掲載された和人によるしゃくりだも、すくいだもの漁法で、右側の五人は見物人である(撮影年代不明)。前回紹介したように、八つ目鰻の漁業権で、学校が建設されるほど八つ目鰻の漁獲があったのである。

『足跡』の「遺跡・史跡・伝説等の位置」に、「やつめうなぎとり岩」があり、その解説に、「往時アイヌの人達が両手でやつめうなぎをつかみほうだいとった所といわれている」とある。これがまさしく、掲載地図と**写真②**「ポロレプシペ(poro-rep-us-pe 大きい・沖・についている・者=岩)」=「やつめうなぎとり岩」である。

ヤツメウナギ(八つ目鰻)は、昭和三十九年に発刊された、『アイヌ語方言辞典』では、八雲方言―ヌクリペ(nukuripe)、沙流方言―ウクリペ(ukuripe)、名寄方言―ウクルペ(ukurpe)、そして、旭川方言―オクルペ(okurpe―門野ナンケアイヌ)、オクリペ(okuripe―門野ハルエ)と表記されている。このように、旭川だけが、オクリペ、オクルペなのである。

①タモによるヤツメとり

右の『アイヌ語方言辞典』の旭川の被調査者(資料提供者=インフォーマント)は、知里真志保や山田秀三のカムイコタン調査に同行・案内をした、門野ナンケアイヌ長老である。門野ナンケアイヌ長老は、松浦武四郎を案内したこともある、上川総乙名(地域の首長)クーチンコロの孫で、明治十四年生まれである。「門野ナンケアイヌ長老と同じ方言を話す人は、妻のハルエ(Harukor)さん・石山Acimiaskur氏の三人きりという。沙流・十勝・名寄などの言葉は、皆ここのとは違う、という」と、言語学上重要な記録が追記されている。

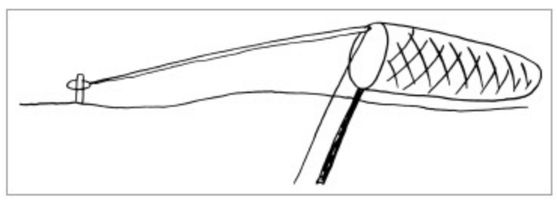
さて、その門野ナンケアイヌ長老伝として、「神居古潭のやつめ」という伝説が、更科源蔵の『アイヌ伝説集』(昭和五十六年刊)に、次のように収録されていて、興味深い。

「昔、文化神サマイクルが山で熊を獲って、木皮舟に積んで石狩川を下って来たところ、ここで舟をひっくり返して、熊の肉と一緒に積んでいた熊の腸を流してしまった。それが石狩川のやつめになったのだ。それで神居古潭にはやつめが多く、また、やつめには骨がないのだ。」

また、門野ナンケアイヌ長老と一緒に、知里・山田のカムイコタン調査に同行・案内した石山アツムヤシク長老のご子息の石山長次郎長老(明治三十五年生まれ)は、カムイコタンでのヤツメウナギ漁について、次のように語っている。実体験談である。

「オクルペ(okurpe ヤツメウナギ)は、春と秋に捕れるが、秋のがうまい。カムイコタンで捕れた。家族全員で捕りに行った。網には捕虫網状のものを用いた。網が流されないように、岸に一端を固定した綱に結び、柄を持って魚が入るのを待った。また、魚がかかったことを知らせるアスルペ(asurpe さわり糸)もついていた。」―**図③**参照―(『昭和五十六年度―アイヌ民族調査Ⅰ』)

②ポロレプシペ



③ヤツメウナギを獲る網

現・神居古潭

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します